



第204回くらしの植物苑観察会 2016年3月26日(土)

## -桜から考える歴史-

小島 道裕(当館歴史研究系 教授)

—日本の植物文化を語る—

花の便りに気もそぞろになる季節、桜と歴史にまつわる、いくつかのお話をしてみます。

### 1. 花見の日付け—桜はいつ咲くか

「ねがはくは 花のもとにて 春しなん そのきさらぎの 望月の比」

西行(1118~1190)のこの歌は、「如月の望月の頃」、つまり2月15日ころに桜が満開のはずだ、と言っています。旧暦ですから、現在の3月中頃ということになるのでしょうか。西行の生きた時代は、今よりも温暖だったようです。花見の日付けを見てみると、その後、室町時代~安土桃山時代は、かなり遅かったことが分かります。

### 2. 花の御所の糸桜と武士の館

足利義満が「花の御所」に近衛邸の糸桜を植えさせた、という記録があります。

「此庭前糸桜小木、大樹(義満)所望之由、(略)可移栽新造花亭、云々」

(近衛道嗣『愚管記』永和4年(1378)2月28日条)

各地の武家館や、それにちなむ寺院などには、枝垂れ桜の古木がかなり見られますが、それは、この「花の御所」の糸桜に起源があるのではないかと、と仮説を立てています。

千葉県山武市の埴谷にある妙宣寺も枝垂れ桜が有名な寺院ですが、地元の武士である埴谷氏の本拠であり、日蓮宗の僧日親の出身地としても知られています。そこから、実生の苗を植物苑にいただきました。



### 3. 女の花見 男の花見

歴博の第2展示室「中世」の「民衆の生活と文化」には、16世紀頃の「月次風俗図屏風」がパネルで紹介されていますが、花見は、「男の花見・女の花見」と、男女別に描かれています。絵画資料を見ると、どうも、男女入り交じっての花見をするようになったのは、近世から、具体的に言うと、豊臣秀吉のころからではないかと思われま

す。中世は女性の地位が高く、妻や後家は、女性たちを引き連れて、女だけで花見を行うことができた、というのが、「女の花見」が「男の花見」と別に存在したことの背景ではないかと思えます。秀吉と「ねね」が仲良く並んで花見をする「醍醐花見図屏風」は、時代の変わり目を描いているとも言えそうです。



4. 桜の樹の下には

「桜の樹の下には屍体が埋まっている！  
これは信じていいことなんだよ。何故って、桜の花があんなにも見事に咲くなんて  
信じられないことじゃないか。・・・」

(梶井基次郎「桜の樹の下には」1928年)

『源氏物語』では、紫の上が亡くなった翌春、その庭に、「おそくとき花の心をよく分きて、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば」、故人が植えておいた花が次々と開きます（『幻』）。故人の植えていた花がその死後に咲くという、死者と花の結びつきを感じさせる一節です。

花、桜を日本人がどう見たか、というと、やはり農耕との関係が大きいようです。桜の咲く時期は時代によって違う、と最初に申しましたが、だから、暦よりも、桜の咲く頃、という自然暦の方が、農耕や人の気持ちには、即しているのかもしれない。

5. 桜の品種—「普賢象」について

今日、一般に「桜」と言えばソメイヨシノですが、これは桜の中では新しい品種で、今の東京都豊島区駒込あたりにあった染井村という、江戸後期から明治半ば頃まで園芸業の拠点だったところで作られ、「吉野桜」というネーミングで売られていたそうです。咲き方が見事なことや、成長が早いことから、近代に入って公園などの公共的な需要で急速に普及し、城跡が桜の名所になるのも、廃城になってから公園化の過程でソメイヨシノが大量に植えられた、ということのようです。

その他の品種について、ひとつだけご紹介すると、「普賢象」という品種が中世に遡ります。宮中の女官の日記である「御湯殿上日記」の、文明12年(1480)3月11日条に、

「御たいの御かたよりふけんさうのはなまいる」

とあるのが初見のようですから、15世紀にはもう知られていたことが分かります。

普賢象（八重桜です）は、この城址公園にもかなり植えられていますから、この機会に覚えていただいで、ソメイヨシノが散った後で、もう一度お花見をしていただくとよいと思います。

【写真】 上：近衛邸の糸桜（「洛中洛外図屏風歴博甲本」歴博蔵、16世紀）  
下：秀吉と北政所きたのまんどころ（ねね）（「醍醐花見図屏風」歴博蔵、17世紀）

【参考文献】

佐藤俊樹『桜が創った「日本」—ソメイヨシノ 起源への旅』岩波新書、2005年

.....

**次回予告** 第205回くらしの植物苑観察会 2016年4月23日(土)  
「江戸の花とさくらそう」 半田 高(明治大学・教授)  
13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要